

子どもにとって望ましい生活環境を考える（1）

— 幼稚園・保育所の好きだった場所を手がかりにして —

A Study of Children's Environments (1)

— Based on “The Places Junior College Students Liked At Day-care Center and Kindergarten” —

中 川 香 子*

Abstract

The purpose of this study is to ascertain the influence nursery rooms and schoolyards have on children's play and lifestyle, and to consider the desirable environment for raising children, as well as related issues.

Two hundred and thirty seven junior college students were surveyed on two occasions, and were asked to describe “the place they liked the most in kindergarten and day-care center, and why.” Over 60% replied that it was either playing in the schoolyard or playing on the playground equipment. Also, for both nursery schools and schoolyards, the fact that preferred places and small spaces were listed was also noticeable.

These results were analyzed in the following manner. In outdoor play, children can go with their friends, move their bodies to the fullest, and set their hearts free. Also, playing on and around playground equipment brings out a sense of challenge in the children, as well as fosters spontaneous, creative play. At the same time, children seek out places where their minds will be at ease and spaces where they can enjoy time alone. Based on these results, it is important to consider from the child's viewpoint the environments which elicit physical and mental growth and creative play.

キーワード：子どもの視点からみた保育環境、園庭と遊具、隠れる場所

はじめに

私たちの子ども時代は、様々な記憶に彩られている。記憶は時として、私たちの心に残る忘れがたい思い出となる。自分一人だけの記憶や思い出もあれば、そこに、家族や親戚、友だちなど子どもの身近な人たちが大切な役割を担って登場することも多い。そしてもう一つ、その構成要素として欠かせないのが、思い出の作られた「場所」である。

それらは、家族や学校で行った旅行先の場所、夏休みや冬休みに遊びに行った親戚の家など、日頃の生活から離れた非日常の場所かもしれない。あるいは、日常の中の慣れ親しんだ場所かもしれない。たしかに、私たちの日々の生活の中にも、いろいろなところに特別の場所がある。家の中、庭、近所、それから学校や職場にも。小さな子どもたちにも、おそらくそのような場所があるに違いない。いわば、お気に入りの場所である。

子どもが日常にかかわりをもつ場所は、もはやたんなる物理的な空間ではない。そこは、各々の過ごし方の中で、子どもの心や体を育てていく場所となる。やがてその場所は子どもの情緒と深く結びつき、彼らの心に何らかの影響を及ぼすようになるだろう。もし、大人になってもなお覚えているそのような場所があるとすれば、そこはどんなところなのだろうか。子どもたちはそこでどのような体験をしたのだろうか。

この小論では、学生たちの子ども時代の記憶を手がかりにしながら、彼らの幼稚園や保育所における場所のイメージへのアプローチを試みる。その作業を通して、場所が子どもにどのような経験や情緒をもたらすかを探り、さらに、望ましい保育環境について考えていきたい。

I 調査方法

S 短期大学の学生に対して、2 回にわたり、以下

* Kyoko NAKAGAWA 聖和短期大学 教授

のようにアンケート調査を行った。

対象：S短期大学2年生（女子）244名

第1回目131名、第2回目113名

場所：S短期大学講義室

日時：第1回目2008年12月、第2回目2011年4月。

いずれも「人と環境」の授業時間の30分程度
を使って行った。

方法：自由記述によるアンケート調査

内容：「あなたが子どもの頃（乳幼児）、一番好き
だった場所とその理由を書いてください。」

この質問に対して、1家、2幼稚園・保育所
の2カ所について回答してもらったが、今回
は、2幼稚園・保育所のみをとりあげる。

Ⅱ 調査結果

1 好きだった場所

2008年の対象者は132名であり、そのうち回答が
あったのは124名（未記入8名）であった。2011年
の対象者は131名で、そのうち回答のあったのは100
名（未記入13名）であった。それぞれのアンケート

<2008年のアンケート結果・好きだった場所>

順	好きだった場所	回答数
1	園庭の固定遊具（鉄棒、ブランコ類、ジャングルジム、うんてい、すべり台、汽車型・飛行機型等の大型遊具、アスレチック、トンネル等）	39
2	保育室の中の特定の場所（ままごとスペース、ロッカーの前・中・下、ピアノとその周辺、隅の畳のスペース、窓のそば、積み木と壁のすき間、押し入れの中等）	19
3	園庭、運動場	16
4	砂場	10
5	小さな家、木製の小屋	8
6	園庭、運動場の中の特定の場所（カメの飼育場所の横の階段、非常階段やその下、バスの駐車場付近、朝礼台の上、建物の裏、ウサギ小屋）	7
7	庭や森（敷地内の森、裏庭、裏山、中庭、花壇）	6
8	保育室	4
8	ホール、遊戯室、体育館	4
10	小道（プールまでの細い道、園舎の裏の細い道）	2
10	事務室、職員室	2
12	その他（トイレ、図書室、裏口の玄関、二階、二階のベランダ、靴の履き替え場所、先生の隣）	7
計		124

<2011年のアンケート結果・好きだった場所>

順	好きだった場所	回答数
1	園庭の固定遊具・室内の遊具（滑り台、ブランコ、ジャングルジム、アスレチック、飛行機型・電車型・船型等の大型遊具、鉄棒、雲梯、ボールプール、ハンモック、それらの遊具の下・間等）	32
2	保育室の中の特定の場所（ままごとスペース、おもちゃや教材のある場所、コートかけの中、棚の下、棚と棚のすき間、保育室の隅等）	18
3	砂場	11
4	園庭	8
5	園庭にある小屋・家	6
5	職員室	6
7	保育室	5
8	動物のいるところ	4
8	園庭の中の特定の場所（山、芝生等）	4
8	敷地内の特定の場所（森の中、トトロの道、種が落ちている場所等）	4
11	植物・樹木のそば	3
12	先生のそば	2
12	ホール	2
12	階段・階段の下	2
12	異年齢の子どもの部屋（乳児の部屋も含む）	2
16	その他（友だちしかいない場所、帰りのバスを待つ椅子、靴箱、食事の席、寺、廊下、ベランダ、全部）	8
計		117

結果を以下にあげる。回答のあった学生のなかには、複数回答をしているものもあるので、回答の合計数は回答者数を上回っている。

2 好きだった理由

それぞれの場所の好きだった理由について、以下回答の多かった項目から順にあげる。似たような理由についてはそれらをまとめ、いずれも簡潔に表記した。また、とくに理由が書かれていないものもあった。

(1)2008年

1 園庭の固定遊具

- ①その遊具で遊ぶのが好きだった
- ②その遊具で考え、工夫し、練習し、上手に遊ぶことが好きだった
- ③その遊具の周辺の空間で、友だちとままごとやごっこ遊びをすることが好きだった
- ④特別のお気に入りの場所として好きだった——眺めがよい、見晴らしがよい、景色がきれいに見えた、大きくなった気がした

2 保育室の中の特別な場所

- ①ままごとが好きだった
- ②自分や先生がピアノを弾いたり、歌ったりするのが好きだった
- ③狭い場所がおもしろかった
- ④隠れて遊んだ
- ⑤窓から外を見ながら昼寝をするのが好きだった
- ⑥押し入れの中で遊ぶのが好きだった

3 園庭、運動場

- ①いろいろな遊具があった
- ②小動物の小屋、花、樹木等いろいろなものとの接触や遊びができた
- ③体を動かすのが好きだった
- ④走り回るのが好きだった
- ⑤みんなで開放的に遊ぶことができた
- ⑥団子作りが好きだった

4 砂場

- ①砂場遊びがすきだった

5 小さな家、木製の小屋

- ①ままごとなどをして遊んだ
- ②秘密の隠れ家のようなだった

6 園庭・運動場の中の特定の場所

- ①小動物の世話が好きだった
- ②バスの送迎をしたかった

- ③見晴らしがよかった

- ④涼しかった

7 庭や森

- ①芝生だったので素足で遊べた
- ②植物の手入れをする人との触れあいが楽しかった
- ③木の実を集めた
- ④花が好きだった
- ⑤坂ですべって遊んだ

8 保育室

- ①生活の場だった
- ②落ち着いた

9 ホール、遊戯室、体育館

- ①広い場所で自由に動けて、コマ回しなどができた
- ②ホールは広くて、たまにしか遊べなかった

10 小道

11 事務室、職員室

- ①特別な場所だから

12 その他

- ①絵本が好きだった
- ②涼しくて気持ちがよかった
- ③みんなが一斉に通過する場所だから
- ④幼稚園全体が見えた
- ⑤先生のそばが好きだった

(2)2011年

1 園庭の固定遊具・室内の遊具

- ①その遊具で遊ぶのが好きだった
- ②その遊具で考え、工夫し、練習し、上手に遊ぶことが好きだった
- ③その遊具の周辺の空間で、友だちとままごとやごっこ遊びをすることが好きだった
- ④特別のお気に入りの場所として好きだった——眺めがよい、見晴らしがよい、景色がきれいに見えた
- ⑤秘密の場所のようだった
- ⑥落ち着く場所だったり、いろいろな想像をしたりした

2 保育室の中の特定の場所

- ①ままごとが好きだった
- ②秘密基地・隠れ家のようなだった
- ③狭いところで友だちと話したり遊んだりするのが好きだった

- ④落ち着く場所だった
- ⑤折り紙や積み木が好きだった

3 砂場

- ①砂遊び、泥遊びが好きだった
- ②泥団子作りが好きだった
- ③水を使って遊ぶのが好きだった
- ④砂の感触が好きだった

4 園庭

- ①みんなで楽しく遊んだ
- ②走り回り、体を動かして遊べた
- ③鬼ごっこができた
- ④水遊びをした

5 園庭にある小屋・家

- ①秘密基地・隠れ家のようなだった
- ②自分だけ、子どもだけの空間だった
- ③狭くて、暗くて落ち着いた
- ④友だちと集まって遊んだ

5 職員室

- ①先生と話したり、遊んでもらったりした
- ②先生や大人がいる
- ③特別な感じがした

7 保育室

- ①友だちや先生と遊べた
- ②落ち着いた、ぼーっとしているのが好きだった
- ③遊具があった
- ④先生がピアノを弾いているのが好きだった

8 動物のいるところ

- ①動物の世話が好きだった
- ②動物の周りに集まって遊んだ

8 園庭の中の特別の場所

- ①秘密基地のようなだった
- ②登ったり下りたり、滑ったりして遊んだ
- ③芝生が裸足でも気持ちよかった

8 敷地内の特別の場所

- ①葉っぱや虫が好きだった
- ②探検できた
- ③ままごとの食材を集めた

11 植物・樹木のそば

- ①木登りをしたり、景色を見たりした
- ②ほっとできた

12 先生のそば

- ①先生が好きだった

12 ホール

- ①広くて動ける

- ②おもちゃがたくさんあり、違う雰囲気の中での
お昼寝にわくわくした

12 階段・階段の下

- ①「グリコ」をして遊んだ
- ②涼しくて、さら砂がたくさんあった

12 異年齢の子どもの部屋

- ①癒された
- ②なんとなく思い出がある

16 その他

- ①自分たちだけの世界が好きだった
- ②友だちと座って話した
- ③お弁当が楽しみだった
- ④涼しくゆったりとした時間を過ごせ、きれいな
装飾を見るのが好きだった
- ⑤お母さんと離れるのがいやで、ずっと座っていた
- ⑥開放感があり、ゆったりと友だちと過ごせた

Ⅲ 考察

1 アンケート結果について

両年のアンケートの結果をみると、2008年の回答の約70%、2011年の回答の約60%が園庭等の外遊びに関係した場所をあげている。調査をする前は、漠然とはあるが、保育室内の場所が多いのではないかと思っていた。しかし実際には、学生たちの心に残っていた好きな場所は、園庭等における様々な場所なのであった。

たしかに幼稚園や保育所の子どもたちは外遊びが好きであり、雨天等で外遊びができないととても残念がる。梅雨の時期にそんな日が続くと、子どものストレスはたまっていく。室内では、大声を出してはいけない、走ってはいけないなどいろいろな制約があるが、屋外では思う存分体を動かしたり、大きな声で友だちと声を掛け合ったり、思いっきり笑ったりできる。太陽や風を感じ、空や雲を見、動植物に触れることができる。いわば自然に近い存在としての子どもには、室内より自然が豊富で自分自身の中の「自然」も解放できる戸外での遊びが、体にも心にも必要なのであろう。たとえ真夏の暑い日であっても、雪の降る寒い日であっても、子どもが喜んで戸外に飛び出しいろいろな遊びに夢中になる所以である。子どもには、戸外での遊びが大切なのだとあらためて気づかされた。

また、保育室や園庭、その他において、子どもに

って特別の場所やお気に入りの場所があげられている。そこで子どもたちは、一人で、あるいは友達ちとともにそれぞれの時間を過ごしている。

回答の大半をしめた園庭での遊びについて書かれたことを検討すると、以下の(1)～(4)のことが考えられた。さらに(5)では、園庭以外における子どもにとっての特別の場所についての考察を述べる。

(1)遊具で遊ぶのが好きだった

園庭等の遊びの中でも、固定遊具で遊ぶことが好きだったと答えた学生が多かった。鉄棒やジャングルジム、滑り台、ブランコ、うんてい等の見慣れた遊具も、子どもにとってはいかに魅力的なものであるかということが分かった。また、それらを使って継続的に遊ぶことによって、子どもは筋力や持久力、バランス感覚、敏捷性など様々な身体機能を発達させていると考えられる。カラフルに彩色された金属製の固定遊具については、美的センスという点からは賛否両論あると思われるが、子どもにとっては日々の遊びを豊かにする大切な遊具であるということを確認することができた。

(2)その遊具を使って遊べるように練習をしていた

固定遊具を使って遊ぶには、それぞれに必要な体の発達や運動能力、技術が必要である。それらが未熟なうちは、特定の遊具を使って十分に遊ぶことができない。そのような未熟さは、子どもに欲求不満を起こさせるというより、向上心やチャレンジする気持ち、上達に向けての努力を引き出すと思われる。彼らはできないことに何度も挑戦し、技術や能力を磨き、やがて遊具でうまく遊べるようになっていく。そして基本的な遊び方をマスターすると、より高度な遊び方や独自の遊び方をみずから考えだしていく。そのプロセスは、修行ともいえる遊具への自己超越的なかわりの部分も含んではいるが、すぐれて自発的・積極的な活動である。子どもが自分で目標を見だし、それに向かって頑張るという姿勢が、遊具によって養われているといっていだろう。このようにみていくと、固定遊具による遊びは、子どもの身体だけでなく精神の成長にも大きな影響力をもっているといえる。

(3)その遊具の周辺で遊ぶのが好きだった

遊具はそれ自体だけでなく、その周囲や下、中、上等のあらゆるところに子どもたちに魅力的な遊び空間を提供しているようだ。それらの場所は、彼らのごっこ遊びやままごとに最適な空間を備えてお

り、イマジネーションを育む母胎となり、友達ちとのコミュニケーションの場となる。遊具が考案された当初の目的以外にも、子どもたちはそれぞれの遊具に豊かな遊び空間を創造していく。それは、子どもの自発的、自主的な遊びがもたらす彼ら自身への贈り物でもある。

(4)お気に入りの場所として好きだった——園庭

園庭のお気に入りの場所として高いところをあげている子どもも多く、子どもがこれほど見晴らしのよい場所や景色を眺めることが好きだということに気づかされた。子どもたちは、そこから展望できる風景を楽しんでいるのだが、自分の通う幼稚園や保育所全体を見渡すことにも興味をもっているようである。自分が遊んだり生活したりする幼稚園や保育所全体を認識したいという気持ちは、その場所への肯定的な感情の現れと理解できよう。また、小さな子どもには、保育室や園庭はとて広く感じられる。その大きな場所を一望できることが、彼らに満足感をもたらすのであろう。

この高い場所は園庭の遊具に限らない。ベランダ、樹木、階段等も子どもたちに眺望の場所を提供している。いつも見上げることの多い子どもにとって、高いところは自分が大きくなったような気分を味わったり、成長への憧憬の思いを暖めたりする場所なのかもしれない。

(5)お気に入りの場所として好きだった——園舎、保育室、小屋等

ここにあげられるのは、小さな家や小屋、狭い場所、ちょっとした空間である。園庭での好きな場所は開放感にあふれていたが、一転して、これらの場所は閉鎖的な空間である。そこは、秘密の隠れ家や基地の様相を呈し、狭く、小さく、薄暗く、それゆえに落ち着く場所となるようだ。そこには、一人の静かでゆったりした時間が流れ、子どもたちは空想に耽ったり、一休みしたり、ぼんやりしたりするのを楽しむ。はたまたそこは、仲良しの友達ち同士でおしゃべりをしたり、秘密基地ごっこをしたりして、親密なコミュニケーションを紡ぎだす場所ともなる。

幼稚園や保育所は、集団での活動を主とする場であり、大人によって管理された公的空間でもある。アンケートにあらわれた隠れ家のような小さな場所は、子どもがその中に自分で見いだした私的空間ともいえる。大人の目の届かない場所への希求は、

「自分だけ、子どもだけの空間だった」という記述によく表れている。

2 望ましい保育環境について

(1)園庭と固定遊具

固定遊具における遊びについて、仙田満は3つの段階があると述べている¹⁾。第1段階は「機能的あそび段階」で、その遊具に備わった基本的な遊びの機能を体験する。第2段階は「技術的あそび段階」であり、遊具での遊びの技術を自分なりに発展させてより速く、よりうまく、より難しい技を習得していく。第3段階の「社会的あそび段階」では、本来の遊びの機能は重要視されず、仲間との集団遊びが展開する。

学生のアンケートの「好きだった理由」においても、これらの段階に相当する記述がみられた。はじめは遊具そのものに興味を持ち、それが提供する使い方を練習するところからスタートするが、基本的な技術をマスターするとより高度で独自性のある遊び方を発見したり、考えだしたりしていく。この「技術的あそび段階」では、一人ではなく、友だちの遊び方に刺激されたり、仲間といっしょに工夫したり、競争したりして遊ぶこともある。

さらに、複合遊具やアスレチックなどの遊具は、遊びの舞台となりやすく、子どもたちの集団遊びを演出する装置ともなる。この場合、遊具そのものが舞台であることもあれば、その下や周辺という間接的な空間に遊びの場が作られることもある。遊びの内容は、仙田によれば「社会的あそび行動」でありゲーム的なものが多く、競争ゲーム、追跡ゲーム、格闘ゲーム、ものまねゲームの4種類である²⁾。今回の調査対象はすべて女子学生ということもあり、集団の遊びとして分類できるものは、ままごとやごっこ遊びなどであり、そこには性差が現れているといえよう。

その他の遊びとしては、「眺めがよい、見晴らしがよい、景色がよい、秘密の場所のようだった、落ち着く場所だった、いろいろな想像をした」などがあつた。これらは遊具の本来的な遊び方とはいえないが、子どもと遊具の多様なかわりを示唆しており、それぞれの愛着のある場所であつたことが分か

る。

仙田の観察によれば、代表的な遊具であるすべり台、ブランコ、シーソー、ジャングルジム等では、機能的な遊びが多かったことが報告されている³⁾。すべり台、ブランコ、シーソー等は、カイヨワの分類ではイリンクス（目眩）に相当する⁴⁾。ブランコやシーソーはイリンクスとしての揺れを特徴とし、乗っていて心地がいうえに疲れないので、長時間一人、二人で遊ぶことができる。しかしブランコでは、友だちと隣り合わせに乗って高くこぐ競争もできるし、シーソーで友だちとコミュニケーションをとりながら遊ぶことも可能である。そういう意味では、これらの固定遊具も、機能的・個別的な遊びだけでなく、なんらかの形で社会的な遊びを引き出すと考えられる。

固定遊具による遊びによって、子どもは、その機能に合った身体的な活動を修得し、それを上達させるとともに独自の遊び方も考案し、さらに仲間との集団での活動も行うことができる。また遊具は、一人で静かに過ごしたり、友だちと隠れ家的に遊んだりする空間をも提供する。

一般的に、我が国の幼稚園や保育所の園庭は、けっして広いとはいえない。そこに並ぶ伝統的な固定遊具は、機能的にもあまり発展がないし、美的な観点からも好ましいとは思えなかった。けれども、このように子どものかかわりからみていくと、それらは多様な遊びを引き出しており、そこから彼らの様々な心身の発達が導きだされると考えられる。現代社会における屋外の危険性（モータリゼーション、犯罪、汚染など）や子どもの多忙なスケジュールを考えると、今や幼稚園や保育所の園庭での遊びはなくてはならないものである。そして、狭くて自然も乏しい園庭の実情を思えば、固定遊具の重要性を再認識し、そのデザインや機能、構成、配置等を検討していくことが重要である。

(2)遊具や遊びに取り入れたい動き

私は、伝統的な群れ遊びについて研究をしてきた。かくれんぼうやかごめかごめ、花一奴などである。それらの遊びのなかには、文献で確認されるだけでも千年以上遊び継がれているものもある。それほどまで長く伝承されてきたということは、子ども

1) 仙田満『遊具における子ども集団形成の研究（Ⅱ）』造園雑誌44 p.93

2) 同上 p.94

3) 同上 p.94

4) Caillois, R.『遊びと人間』pp.60-66

たちがずっと手放さずにいた理由があるからである。一言でその理由を説明するならば、おもしろいからである。そのおもしろさの内容を考えていくと様々な遊びの特徴や要素、テーマがみえてくるが、動きもその一つである。それを以下にあげる。

- ・かくれんぼう——隠れる
- ・かごめかごめ——まわる（イリンクス）
- ・花一匁——攻撃的な動作（相手方に足を蹴り上げる、迫る）
- ・鬼ごっこ——走る、方向転換、攻撃的な動作

かくれんぼうでは、隠れることがもっとも特徴的である。それは、動かないという動きであり、自分が一時的に消えることである。「隠れる」という行為は、人間の脳の古い部分に属し、縄張りの確保や狩猟、帰巢などと同様に本能的なものだという⁵⁾。子どもは小さなときから、「いないいないばー」を喜んだり、ちょっとしたところに隠れて、それを親しい大人に見つけてもらうのをうれしがる。これはかくれんぼうの初歩であり、ことほどさように子どもたちは隠れることを好むのである。

また、かごめかごめにおける「まわる」動きは、カイヨワによる遊びの分類ではイリンクス（目眩）にあたる。イリンクスには、揺れ、緩やかな回転、激しい旋回、滑降、スイッチ（方向転換）、落下など様々なものがあるが、いずれも三半規管の攪乱によって生じる感覚である。この動きは激しすぎると気分が悪くなったり怖かったりするのだが、適度であれば心地いい目眩をおこさせる。子どもが小さな頃からぐるぐる回ったり、揺られたりすることを好むのは、この動きが快いからに他ならない。

仙田は、遊びが発生しやすい遊具は動線が循環しているということに着目した上で、遊びの成立における空間的・構造的な特徴を「遊環構造」と名付けている。彼もまた、「まわる」動きや「めまい」の感覚の重要性を指摘し、それらを含む以下の7項目を遊具や遊び空間のデザインにおける条件としている⁶⁾。

- ・循環機能があること
- ・その循環（道）が安全で変化に富んでいること
- ・その中にシンボル性の高い空間、場があること
- ・その循環に“めまい”を体験できる部分があること

と

- ・近道（ショートカット）ができること
- ・循環した広場、小さな広場等がとり付いていること
- ・全体がポーラスな空間で構成されていること

次に「攻撃性の解放」である。攻撃性もまた人間にとって本来的な性質である。攻撃性は人や物へ向かう破壊性と結びつかない限り、私たちが活動的、積極的に生きていくうえで必要なものである。花一匁では、互いに相手のグループに向かって声を張りあげて歌を掛け合い、足を蹴りあげる。ここでは、遊びの中で子どもたちの攻撃性がいとも愉快に解放される。その他鬼ごっこでも、追いかける、逃げる、走るというシンプルな活動の中で、身体を中心にした良質の攻撃性が発揮されるのは言うまでもない。このような遊びにおいては、子どもは攻撃的にならなければおもしろくない。というより、遊びは成り立たないのである。攻撃性という言葉は誤解されやすいが、けっして暴力とは同義語ではない。その本当の価値について遊びを通して体験し、みずからの攻撃性を成熟させていくことが肝要である。

既存の遊具には、上述したような伝承遊びにみられる動き——とくにイリンクスを主とするものが多くある。子どもが園庭の遊具を好むのは、これらの動きが彼らの本質的な欲求を満足させる要因になっているからだと思われる。

(3)隠れる場所

子どもは活動的であるが、たえず動いてばかりいるわけではない。外遊びが好きな子どもでも、一休みしたり、静的な遊びをしたりする。また、大人の目が届きにくい空間や狭くて小さな空間も求めている。私の観察では、園庭の隅の木陰、裏庭の片隅、保育室の家具の隙間や裏側、階段の下空間などには、必ずといっていいほど子どもの姿を見つけることができた。戸田瑞穂も子どもが保育室でよく遊んでいる場所を10カ所あげているが⁷⁾、その中で保育者が子どもの活動のために意図的に用意した場所は2～3カ所である。他の場所は、いずれも家具やカーテン、ピアノなどによって偶然にできた小さな空間、あるいは人目につきにくい場所である。アンケートの記述にも、そのような場所が多くみられ

5) Tuan, Y. 『トポフィリア』 p. 43

6) 仙田満 『あそび環境のデザイン』 p. 8

7) 戸田瑞穂 「物的環境から見た保育室の遊び」 保育研究 VOL. 13 NO. 3

た。

イーファ・トゥアンによれば、それは「閉じた」空間であり、それについて次のように述べている。

開いた空間は、自由や冒険の見込みや、光や公共の領域や、公式的で不変の美を意味している。閉じた空間は、子宮の心地よい安全や、私生活や、闇や生物的生活を意味する。……中略……種としてみれば、人間の祖先である霊長類は、熱帯雨林の子宮のような隠れ場から、公園のようなサバナの、広々とした予測できない環境へと移住した⁸⁾。

確かに閉じた場所への愛着は、系統発生的にも個体発生的にも原初的・深層的な経験に発していると考えられる。閉じた場所はとうじに「隠れる場所」でもあり、大人の管理の枠外に存在し、そこに子どもだけの親密な空間を作ることができる。また、一人で心身の休息をとる場所ともなる。

先にあげた仙田による遊び環境の構造のなかに、「全体がポーラスな空間で構成されていること」という条件がある。彼によれば、「ポーラス」とは「穴が開いている」という意味である⁹⁾。指が入るくらいの小さな穴から体が入る大きな穴まで、子どもは穴があれば覗いたり、指や腕を入れたり、もぐりこんだり、隠れたりする。また、ある遊び空間や建物にいくつかの出入り口があれば、子どもは自由に出入りできる。このようないろいろな穴があることによって、子どもの行動が大きく異なってくるというのである。

幼稚園や保育所にも、このような隠れる場所を意図的に取り入れることが望まれる。柴崎正行は、具体的な事例をあげながら、いくつかの視点から保育現場における環境づくりへのアドバイスをしている。彼は、「くつろげる環境づくり」というテーマで6つの幼稚園の事例を紹介している¹⁰⁾。小さな空間に椅子を置いたり、保育室にちょっとした仕切りを作ったり、畳やソファ、こたつを置いたり、テラスを家庭的な空間として利用することなどによって、ずいぶん居心地のいいくつろげる場所ができるのである。

いろいろな幼稚園において、偶然にできた素敵な隠れ場所をいくつも見かけたことがあるが、死角になって危険だからと物置にしているところや子ども

は立ち入り禁止というところもあった。たしかに、子どもの安全の確保は最重要のことではあるが、彼らの隠れたいという本能的な欲求を満たしてやることも必要であろう。仲間と開かれた空間で自分を表現することと、閉じられた空間で内的な世界に遊ぶことの両方が、子どもの心身の成長にとって大切なことだからである。

おわりに

子どもの心身の成長にとって、場所は大きな役割を果たす。家、幼稚園・保育所、学校、公園、広場……。場所は、そこでの体験がもたらす様々な情緒と結びつき、子どもの記憶に刻みこまれていく。また、場所は子どもの身体の成長・発達にも大切な役割を担っている。

この小論では、学生たちに幼稚園や保育所での「好きだった場所」のアンケート調査を行い、その結果の分析から、子どもの生活や遊びに必要と思われる保育環境についての考察を行った。

そこからみてきたのは、まず、子どもは園庭や固定遊具での遊びを好むということである。幼児期に屋外で思いっきり活動することは、彼らにとってかけがえのない楽しみのようである。また、園庭の遊具は、子どもがそれらで遊ぶ技術や能力を磨いたり、独自の遊び方を工夫したり、遊具の周辺で仲間とごっこ遊びをしたりと、様々な体験を提供していることが分かった。園庭や遊具の価値を再確認し、たとえ狭い園庭であっても、遊具の選択や配置などを工夫することによって、子どもがより活発に遊ぶことができるのではないだろうか。

次に、私が行ってきた伝承遊びの研究などから、遊具や遊ぶ場所を考える際に、「隠れる・まわる・攻撃性を解放する動作」などの動きを取り入れることが望ましいと考えた。これらの要素は、子どもの心身における本能的な欲求を満たし、遊びを活性化させられるからである。

また子どもは、仲間と活動するいわば公的な遊び空間だけでなく、自分だけの空間を求めていることも分かった。その多くは、保育者や遊具の制作者が意図的に準備したというより、子どもがみずから探し出した小さな空間であった。そこは子どもがくつ

8) Tuan, Y. 『トポフィリア』 pp. 67-68

9) 仙田満 『子どもと遊び』 pp. 113-114

10) 柴崎正行編著 『保育環境の構成』 pp. 53-76

ろいだり、休息したり、想像をふくらませたりする場所として彼らの生活を支えていると考えられる。

子どもにとって望ましい保育環境を構成するには、上述したこと以外にも、安全面への配慮や活動内容の想定など、様々な点を考慮しなければならない。しかし大切なことは、できるだけ子どもの視点に立つことであろう。そうすることによって、子どもたちが生活や遊びの中で安心して自己表現し、より自発的・積極的な活動を創造することができると考えられる。

参考文献

- (1) Caillois, R. 多田道太郎・塚崎 幹夫訳『遊びと人間』講談社学術文庫 1958年
- (2) 岩田純一『子どもはどのようにしてくじぶん>を発見するのか』フレーベル館 2005年
- (3) Erikson, E. H. 『幼児期と社会Ⅰ』みすず書房 1977年
- (4) ミズマモニカマリ『園庭の大型固定遊具の変化に伴う幼児の遊びの変容』早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 15号-2 2008年 pp.119-130
- (5) 村田眞澄『園の固定遊具における遊びのあらわれとその意味』愛知教育大学教育実践総合センター紀要 第2号 1999年 pp.123-128
- (6) 無藤隆「トボスにおける発達第2回」『幼児と教育』日本幼稚園協 pp.29-36
- (7) 中川香子『かくれんぼ—内なる世界を育てる』1993年 人文書院
- (8) 中川香子『もう一人では生きていけない—個と共生のころ／かごめかごめ』2003年 新曜社
- (9) 仙田満『子どもと遊び—環境建築家の眼』岩波新書253 1992年
- (10) 仙田満『遊具における子ども集団形成の研究（Ⅱ）』造園雑誌44 pp.93-98
- (11) 柴崎正行編著『保育環境の構成』小学館 1997年
- (12) 戸田瑞穂「物的環境から見た保育室の遊び」『保育研究』VOL.13 NO.3 pp.14-25 1992年
- (13) Tuan, Yi-Fu 小野有五・阿部一『トボフィリア』ちくま文芸文庫2008年